



## ◆トランスナショナル・コミュニティにおけるエスニシティの形成◆

シンガポールにおけるキリスト教徒インドネシア人移民の事例から

齋藤 千恵

(南山大学人類学研究所非常勤研究員)

## I. はじめに

シンガポールは、トマス・ラッフルズによる発見以降、多くの民族が移民し、その移民により形成されてきた国家である。トバ・バタックたちも、また、インドネシアからこの国に移民し、インドネシアから移植した彼等の民族教会を中心にコミュニティを形成している。このコミュニティは、絶えずインドネシア人が流入することもあり、地理的にはシンガポールに位置するが、様々な形でインドネシアに影響されている。シンガポールでは、トバ・バタックは、殆どその名が知られていないマイノリティ・グループである。そのため、彼等のエスニシティの表現は、主に、このコミュニティの中で行われる。そして、対外的には、しばしば、彼等は、インドネシア人と自身を名乗るのである。

本稿では、二つの国家に影響されるトランスナショナル・コミュニティにおけるキリスト教徒インドネシア人移民のエスニシティの表現について論じる。<sup>1</sup>特に、インドネシア及びシンガポールのナショナル・イデオロギーに影響され、キリスト教徒トバ・バタックがエスニシティを形成していく過程を検討する。トバ・バタック教会は、この二つのナショナル・イデオロギーが交錯する場なのである。ここでは、第一に、シンガポールのトバ・バタック教会について、次に、シンガポール及びインドネシアのナショナル・イデオロギーについて述べる。第三に、シンガポール人トバ・バタックたちがシンガポールの民族政策の下で、国家により与えられたアイデンティティに抵抗するために、インドネシア人というナショナリティをエスニシティとして用い、インドネシアのイデオロギーに自己の民族アイデンティティの根拠を求めていくことを論じる。このトランスナショナル・コミュニティでは、ナショナリティはしばしばエスニシティと絡み合っているのである。最後に、トバ・バタック個人が、二つのナショナル・イデオロギーを選択的に用いて、シンガポールでの自己の利益のために、民族ヒエラルキーを操作し、エスニシティを形成していく過程を述べる。

## II. シンガポールのトバ・バタック教会

シンガポールのトバ・バタック教会は、戦後、トバ・バタック移民によって、設立された。この教会の母体は、HKBP (バタック・プロテスタント・キリスト教教会) として知られるトバ・バタックのホームランド、北スマトラにその本部を置く、アジアで最大規模のルーテル教会である。

シンガポールのHKBPの信徒は、トバ・バタックと少数ながら彼等の非トバ・バタック配偶者から成り、国籍に関しては、約半数がインドネシア人で、残りの半分がシンガポー

ル人から成る。この教会では、現在、全ての長老は、二世のシンガポール人トバ・バタックであるが、インドネシアの教会本部から牧師職を任じられた牧師は、インドネシア人トバ・バタックであり、また、教会の委員長と何人かの委員もインドネシア人である。こうしたコミュニティで、インドネシア人及びシンガポール人の教会リーダーたちや他の信徒の経験——これは、二つの国家のナショナル・イデオロギーにより形成されている——が、彼等のエスニシティの表現に影響するのである。

### Ⅲ. 二つのナショナル・イデオロギー

シンガポールは、東南アジア唯一の華人が多数派を占める多民族国家であり、政府は、国民を四つの「人種」カテゴリーに分類している。その四つとは、華人、マレー人、インド人、その他である。<sup>2</sup> この「人種」カテゴリーは、シンガポールの民族及びアイデンティティ政策の根本をなしている。政府は、これら四つのカテゴリーのうち、華人、マレー人、インド人という主要三カテゴリーのそれぞれの成員は、一つの文化を共有するとみなし、また、共通の「母語」を持つものとしている。シンガポール国民は、学校教育において、この「母語」として定められた言語を習うことにより、また、その他の日常的な場面において、この「人種」として表されるアイデンティティを経験している。

トバ・バタックは、インドネシア及びマレーシアに起源を持つ他の民族と共に、「マレー人」として分類されている。(しかし、一方で、マレーというのは、一つの民族集団の名前でもあるのである。)<sup>3</sup> このため、トバ・バタックの間には、この国家により与えられた「人種」アイデンティティと自己のエスニシティの理解のギャップから由来するアイデンティティ・ジレンマが存在する。シンガポールでは、特定の「人種」や宗教信奉者のステレオタイプは、そのナショナル・イデオロギーを反映しており、こうした「人種」のステレオタイプは、シンガポールの「人種」或いは民族ヒエラルキーの説明基盤となっている。このヒエラルキーにおいて、「マレー人」として分類されるトバ・バタックは、最下位に位置付けられる。

民族ヒエラルキーの上位に属するのは、マジョリティである華人である。華人は、一般的に金銭欲が強いと見られているものの、勤勉であり、成功しており、また、進歩的であると見られている。こうした華人の表象は、華人がシンガポールの経済発展を作り出したということを印象付ける。この裏返しは「マレー人」の表象である。「マレー人」は、伝統的であり、怠惰であり、迷信的であると見られている。これらは、近代的で進歩的とされるシンガポールでは、否定的な含意を持つ特色である。「マレー人」はまた、シンガポールの経済発展には、適応していないとも表象されるのである。

シンガポールのマスメディアは、しばしば、「マレー人」の不適応をもたらす問題は、「マレー」文化に根ざしており、従って、「マレー人」に特有のものであると報道する。こうした問題は、例えば、高い学校中退率、高い離婚率とそれと関連する家族問題、貧困、低学歴、向上心と動機の欠如、保守主義と伝統主義である。<sup>4</sup> 華人や「マレー人」を含むシンガ

ポールのリーダーたちは、こうした問題とこれらが作り出す「マレー人」のステレオタイプを、時には仄めかし、また、時には強調し、「マレー人」が発展するシンガポールで生き残るためには、教育や更なる技術的な職業訓練が必要だと力説するのである。こうした民族のステレオタイプはマレーシア、インドネシアという「マレー人」国家に囲まれたシンガポールでの華人の優位性と「人種」ヒエラルキーの最下位という「マレー人」の位置を説明するのである。<sup>5</sup>

こうした「マレー人」の否定的な表象に比べて、トバ・バタックたちの宗教であるキリスト教とその信奉者の表象は、肯定的なものである。シンガポールは多宗教国家でもあり、その宗教的所属はだいたい「人種的」分類と一致している。例えば、「マレー人」の大部分はイスラム教徒であり、ヒンズー教徒の殆どはインド人、仏教及び道教徒は主に華人である。キリスト教だけは、各「人種」カテゴリーからその信奉者が出ている。

キリスト教は、1980年代にその信奉者の人口比率を10.3%(1980)から18.7%(1988)に伸ばしたのである(*The Straits Times*1989:1)が、<sup>6</sup> Tong(1989)によれば、このキリスト教徒人口の増加は、カリスマ教会<sup>7</sup>の熱心な布教とキリスト教やその信者の肯定的な表象のためである。キリスト教は、英語の宗教であり、近代的で合理的な宗教であると見られている(Tong 1989:32-33)。このキリスト教の特徴の一つである合理性は、工業化によるシンガポールの急速な経済発展や洗練されたテクノロジーの導入と深く結びついており、また、英語は、シンガポールの公用語の一つで、商業と工業の言語であると見なされている。加えて、シンガポールでは、多くの議員や教員がキリスト教徒であることが知られており、また、マスメディアは他宗教の信奉者と比べ、キリスト教徒の多くが高学歴を持ち、上・中流階級に属し、高収入であると報告している(*The Straits Times* 1989:1, Heng and Tan 1989:19, Soong 1989:22)。後述するように、トバ・バタックたちは、こうしたキリスト教徒のステレオタイプを使って、民族ヒエラルキーでの自身の地位を上げ、トバ・バタック独自のエスニシティを主張するのである。

こうした宗教や「人種」カテゴリーのステレオタイプに現れるシンガポールのナショナル・イデオロギーに加え、インドネシアのナショナル・イデオロギーもトバ・バタックの民族アイデンティティの形成に影響する。インドネシアの最も重要なナショナル・イデオロギーは、パンチャシラに表されるものである。パンチャシラは、唯一神への信仰、ヒューマニズム、ナショナリズム、民主主義、社会正義の五原則からなる。その内、最も重要とされるのが、唯一神への信仰である。この第一則は、必ずしも一神教への信仰を意味せず、アガマ (*agama*) と呼ばれる宗教省に認可された宗教、例えばキリスト教プロテスタント、カトリック、イスラム教やヒンズー教である。このアガマへの信仰は、他の四則の基盤になっていると考えられている。国家は、アガマという公的に認められた宗教を信奉することを国民に勧めており、インドネシアの経済発展は、こうしたアガマの価値に基づいたものであらねばならないとしている。また、インドネシアでは、一般的に、アガマを持つものは、「進歩的」であり、政府に忠実であると見なされている。一方、アガマ以外の

ることは、イスラム教徒であることを意味し、そして、イスラム教徒は親子関係を除いて親族関係を維持することはできないのである。従って、イスラム教徒であることは、親族集団やその歴史を捨てることを意味するのである。

こうしたインドネシア人として自身を主張することの背景には、シンガポールのアイデンティティ政策への批判が見え隠れする。前述したように、シンガポールでは、トバ・バタックは公的には「マレー人」として分類され、「マレー人」として、このカテゴリーの他の成員と、宗教を含む「マレー」文化を共有していると見なされる。一方、インドネシアは彼等の祖国であり、また、キリスト教を含む多様なアガマや多民族の共存を積極的に認めている。こうしたインドネシアのナショナル・イデオロギーにオープン M ボルを始めとするトバ・バタックたちは、自身の民族アイデンティティを求めるのである。

こうした例のように、インドネシアのイデオロギーは、トバ・バタックたちにより、シンガポールの政策を批判し、自身の民族アイデンティティを打ちたてようとする試みの中で用いられる。1997年に新しくシンガポールの HKBP 教会に赴任した牧師は、意識的にもまた無意識的にも信徒への説教や堅信式を受ける少年少女のためのクラスでの講義を通して、こうしたイデオロギーを取り入れたキリスト教世界を確立しようとしている。この牧師は、こうした機会において、シンガポールは、物質的な成功のみを追い求め、その結果、神を忘れてしまっている、つまり、シンガポールの経済発展は人間の生活の宗教的な側面を無視しているということを繰り返して説いている。ある日曜日の堅信式準備クラスでも、やはり、彼は、この批判を繰り返し、シンガポールのような先進国では、人は「霊的な力」や神を信じず、完全にテクノロジーや科学に頼ってしまっているということを述べた。ここで、彼が言及する「霊的な力」や神は、キリスト教の神のみならず、他の宗教の神をも含んでいた。これは、経済発展は宗教的な価値観に基づいてなされねばならないというインドネシアのイデオロギーを呼び起こすものである。

この牧師のシンガポールに対する批判は、シンガポール人トバ・バタックたちによるインドネシア人トバ・バタックの特徴づけとのディスコースから生じている。シンガポール人トバ・バタックたちは、「マレー人」の表象をインドネシア人にあてはめ、インドネシア人は先進国の生活に適応していないと主張する。彼等は、インドネシア人は伝統的で、貧しいと言う。一世の女性たちは、これに加えて、インドネシアは発展したシンガポールとは生活様式が異なるので、インドネシア人はシンガポール人よりも勤勉ではないと特徴付ける。一方、シンガポール人トバ・バタックが描く自身の像は、勤勉で裕福、そして都市化されているというものである。こうしたインドネシア人とシンガポール人の対比は、経済発展の中での文化に対する態度に関する議論にも繋がってくる。ナショナル・イデオロギーが支持し目指す経済発展との関係で、文化が論じられるかぎり、トバ・バタックのエスニシティは、ナショナル・イデオロギーにより影響されることとなるのである。

シンガポールにおけるトバ・バタックの自身の文化に対する態度は、一世と二世の間では相違がある。二世の間でも、また、一人のトバ・バタックの中でも、時と場合によって、

宗教を持つ、或いは、無宗教の者は、それぞれ、「後進的」、コミュニストであると見なされる(Kipp and Rodgers 1987:23)。

第二、第三則は、インドネシアの多様な民族と宗教の間での寛容さと統一を唱え、多様な民族及びアガマの共存を認めている。第四則は、話合いの結果、満場一致を目指すインドネシア流の民主主義である(Ramage 1995:12,13)。第五則では、社会的及び経済的平等主義が強調されている。インドネシアでは、経済発展の過程で集団性が重要視されているのである (Ramage 1995:13-14)。また、キリスト教プロテスタントの高校の教科書(Dewan Redaksi Program PAK-PGI 1988:92-93)では、こうした集団性が重視される経済発展は、アガマの価値により支持されている。

HKBP は、パンチャシラに代表されるこうしたイデオロギーをキリスト教に取り込んでいる。例えば、教会教義を説明する『信仰告白』(Kantor Pusat HKBP n.d.a, n.d.b)や全HKBP 教会で読まれる司教の新年の説教はこうしたイデオロギーを含んでいる。この他にも、絶えずインドネシアから流入してくる人々やインドネシアのマスメディアがインドネシアのナショナル・イデオロギーをもたらし、シンガポールの中にあるこのコミュニティは、シンガポールとインドネシアのナショナル・イデオロギーの葛藤の場となっている。<sup>8</sup>

こうした場で、人々は、二つのナショナル・イデオロギーのどちらかを用いることによって、エスニシティにおけるジレンマを解決しようとするのである。

#### IV. ナショナル・イデオロギーとエスニシティ

トバ・バタックのコミュニティでは、エスニック・アイデンティティはナショナルリティと絡みあっている。トバ・バタックたちは、しばしば、国家が発行する自身の身分証明書にある「人種」の記載を「マレー人」とするよりは、インドネシア人にするべきであると主張する。<sup>9</sup> シンガポールでは、ほとんど知られていないこの民族は、身分証明書にインドネシア人というナショナル・アイデンティティを記載することにより、自身を「マレー人」とは区別しようとするのである。

例えば、一世のシンガポール人トバ・バタックであるオンブン M ボル (M の祖母: 仮名) の場合、経済的な理由からシンガポール国民となり、その後、「マレー人」と人種欄に記載された身分証明書を持つようになった。彼女によれば、当時、国家による身分証明書作成は村ごとになされ、行政官が彼女の肌を一瞥し、その申込書に「マレー人」と記載したという。彼女は、その時、自分はインドネシア人であると主張したものの、そのまま「マレー人」と記載されてしまったと述べる。現在も、身分証明書には、インドネシア人と記載されるべきだと主張する彼女は、マレー人はトバ・バタックのようなマルガ (リネージ) を持たず、ただ、父と子の関係を示す「bin」をその名前に持つのみであると主張する。彼女は、また、「マルガは[系譜の]上から下まで続く」と言う。つまり、トバ・バタックの各々は、それぞれの親族集団であるマルガに属し、そのマルガ名はマルガの創始者から一番若い成員まで、集団の全ての成員が受け継ぐのである。一方、彼女にとって、マレー人であ

その対応は異なる。二世の教会長老であるババ T (仮名) は、様々な場面で、トバ・バタックの文化の維持を主張するものの、教会長老たちのミーティングの後の私的な会話では、インドネシア人トバ・バタックや一世たちは、民族文化にしがみついており、伝統的であり、こうした文化に対する姿勢には何の利点もないと批判した。この会話の折には、コンピュータやワイン、子供の教育の話が出ており、また、私という日本出身で、当時、米国の大学院に在籍していた調査者の同席もあり、先進国という場が意識されていた。こうした文脈で、この長老は、トバ・バタックの民族文化への執着は、変化していく社会に合わないものであると述べたのである。彼の結論は、インドネシア人は、このため「悪い (*bad*)」というものであった。この長老の発言は、間接的にインドネシアにおける民族文化のあり方を批判していると言える。彼は、インドネシアのナショナル・イデオロギーも支持しているインドネシア人の自身の文化に対する態度を、シンガポールにおける「マレー人」の文化に対する態度への批判（「マレー人」は伝統的であり、その結果、シンガポールの経済発展に適応できないという批判）を援用して批判し、シンガポールにおけるトバ・バタック・アイデンティティを模索するのである。これに対して、インドネシア人の牧師は、こうしたシンガポール人トバ・バタックのインドネシア人に対する批判は、シンガポールの経済発展と物質主義から来ている傲慢さのためと考え、先の講義で、宗教の重要性を強調したのである。

こうしたインドネシア人牧師が打ちたてようとするキリスト教世界の表象に関わらず、個々のトバ・バタックたちは、二つの国家イデオロギーに関して、自由に自身が好むアイデンティティを選択する。シンガポール人トバ・バタックたちが、インドネシア人に適用した「マレー人」のイメージは、「マレー人」として分類される彼ら自身に押し付けられたものである。しかし、「マレー人」はイスラム教徒と考えられており、また、前述したように否定的なイメージを与えられている。こうしたことから、多くのトバ・バタックは、「マレー人」としてのアイデンティティを意識しながらも、これを拒否するのである。トバ・バタックの個々人がしばしば言うのは、自身はキリスト教徒であり、こうした宗教的な所属は、彼等を「マレー人」と区別するということである。こうしたこともあり、キリスト教徒であるということは、トバ・バタックのエスニシティに不可欠な要素なのである。

こうした文脈で、シンガポールのトバ・バタック教会コミュニティでは、キリスト教が彼らを西洋人に結びつけると考える者もいる。西洋人は、シンガポール人トバ・バタックのある者にとっては、華人よりも優れているのである。例えば、教会長老ババ T は、西洋人として彼が分類するユダヤ人とトバ・バタックを結びつけ、トバ・バタックの優位性を述べる。この長老によれば、ユダヤ人は選民であり、このため、彼らは、多くのノーベル賞を取り、また、米国では、多くの弁護士がユダヤ人であるという民族的業績を持つのである。彼は、ユダヤ人のように、トバ・バタックも神に選ばれた民族であり、それは、トバ・バタックの優位性や成功を暗示しているのだと述べる。

キリスト教徒のアイデンティティは、トバ・バタックたちに民族的な優位性を語らしめ

る。彼らは、シンガポールのキリスト教徒のイメージを用いて、自身の民族を表現する。つまり、トバ・バタックの多くは、高学歴を持ち、教育を重視し、また、勤勉であり、高収入をもち、そして、賢明であると表すのである。こうした特徴や選民として約束された物質的な成功は、「マレー人」の表象とは反対のものである。シンガポールでの「人種」アイデンティティを意識した上でのエスニック・アイデンティティの表現なのである。

一方、インドネシア人、シンガポール人に関わらず、インドネシアのナショナル・イデオロギーを用いて、トバ・バタックたちは、自身の民族を華人の上に位置付けようとする。ここでも、キリスト教徒アイデンティティは重要なものとなる。ある聖書研究会でのことであつた。この会では、キリスト教徒に対する食物の禁忌が論じられていたが、その話題が発展して、華人の仏教徒や道教徒による祖霊崇拜と祖霊や餓鬼に供えられる食物に関する議論となった。インドネシア人トバ・バタックの妻を持つ二世の教会長老ババ M (仮名) がこうした死者への供え物がしてある場で、華人と食事を共にしても良いかという質問をした。これに対して、二世の女性と結婚しているインドネシア人トバ・バタックの教会委員長ババ S (仮名) は、自身のインドネシアでの経験を話した。彼が子供の頃、華人が祖霊に供えた食物を村のトバ・バタックの子供総出で食べてしまったが、何ともなかったという経験である。このやり取りの中で、ババ S とババ M は、華人の祖霊崇拜と餓鬼供養を幽霊 (*hantu*) 崇拜と表現している。華人は、幽霊を神のように崇拜し、食物を捧げているとみなしているのである。こうした見方は、キリスト教徒トバ・バタックたちにより *sipele begu* (幽霊崇拜) と呼ばれるトバ・バタックの祖霊崇拜の慣習に対する、インドネシアのナショナル・イデオロギーに沿った見方を反映している。インドネシアのナショナル・イデオロギーにあるように、彼らは、こうしたアガマとは相容れない宗教的行為を行う者は、後進的であると見なす。この見方を援用し、祖霊や餓鬼に食物を捧げる華人も、彼らにとっては後進的な者であり、民族ヒエラルキーにおいて、彼等よりも下位に位置づけられることとなるのである。

また、華人の民族ヒエラルキー上の位置を利用し、そのイメージを共有することで、トバ・バタックのアイデンティティを変えていこうとする努力もある。二世のトバ・バタックの間での、子供たちに華語を習わせようとする試みがそれである。二世の親たちの中には、彼らは華語が話せないものの、保育園や学校で子供にマレー語ではなく華語を選択させる者がいる。<sup>10</sup> 華人はシンガポールでは多数派であり、新聞の求人広告には、華語を話す者の募集がよく載っていることから、華語を習得することは、子供の将来にとって、プラスとなる。しかし、これだけではなく、華語を習得するということは、民族のイメージにも関わることなのである。

特定の言語を母語とする民族の「頭の良し悪し」をその言語の難易度により図る言説が、華人の民族ヒエラルキーでの位置を支持するために用いられることがある。この言説は、科学的な装いを持っているため、しばしば、説得力を持つ。教会が経営するトバ・バタック船員のためのホステルを訪れた時のことであつた。その時、一人のトバ・バタック船員

が同じホステルに住む牧師と華語を習得することの難しさを議論していた。船員は、華語はマレー語やインドネシア語よりも難しいので、華人はマレー人やインドネシア人よりも頭がいいはずだと主張していた。これに対して牧師は、インドネシア語とマレー語もそれを母語としていない者にとっては、難しいのだと、インドネシア語を母語としない私の同意を求めつつ述べた。牧師は、この船員の主張に反対するものの、彼も、言語の難易度と民族の「頭の良し悪し」を関連づけているのである。また、ここでの船員の発言は、シンガポールの民族ヒエラルキーにおける華人の位置を受け入れ、彼が想定する言語の難易度と華人の優位性を結びつけたところから来ている。

トバ・バタックの二世の親たちにとっても、華語という言語の取得の困難さと華人の優位性は結びつき得る。彼らにとって、その子供たちに華語を取得させることは、子供から「マレー人」の否定的なイメージを拭い去り、華人と肯定的なイメージを共有させることに繋がるのである。彼等は、その子供たちに華語を取得させることを、シンガポールにおける成功への鍵と見なしており、「人種」のステレオタイプに表れるナショナル・イデオロギーに支持された新しいトバ・バタック・アイデンティティを模索しているのである。

このように、トバ・バタックは、二つのナショナル・イデオロギーを戦略的に用いることで自身のエスニシティを表す。エスニシティの表現は多様であるものの、「マレー人」という国家に与えられたアイデンティティと民族のヒエラルキーを意識し、トバ・バタック個々人が自身の民族を位置付けようとする時、それらの根拠となっているイデオロギーを用いたり、また、発展や民族のあり方に関して異なる強調点を持つインドネシアのナショナル・イデオロギーを用いて、自身の民族アイデンティティを表現しようとするのである。

## V. 結語

シンガポールにおいて、トバ・バタックたちは、「マレー人」という、与えられているアイデンティティと彼らが理解する自らのエスニシティの間のギャップのために、アイデンティティのジレンマを経験している。このアイデンティティ・ジレンマを解決するため、彼らはしばしば、インドネシア人を主張し、また、インドネシアのナショナル・イデオロギーを用いることで、自らの民族及び宗教的アイデンティティを主張する。インドネシアのナショナル・イデオロギーは、シンガポールのそれへのカウンター・イデオロギーともなり、「マレー人」というに押し付けられたアイデンティティとは異なったアイデンティティをもたらすのである。トバ・バタック個々人は、また、シンガポールの国家イデオロギーを反映する宗教的、民族的ステレオタイプを用いることで、民族ヒエラルキーを操作し、自身をそのヒエラルキーの上位に位置付ける。彼らは、ナショナル・イデオロギーとそのカウンター・イデオロギーを戦略的に用いることで、シンガポールの民族・アイデンティティ政策と競い、エスニシティを形成していくのである。

## 註

1. 本稿は、2002年7月27日開催の中部人類学談話会例会での発表を基にしている。この発表の機会を与えて下さった方々と、参加して質問やコメントを下さった方々に謝意を表したい。
2. シンガポールの国勢調査によれば、華人が人口の77.7%、マレー人14.1%、インド人7.1%、その他が1.1%を占める (Department of Statistics 1992a:xiv)。
3. ここでは、民族としてのマレーと「人種」としてのマレーを区別するために、「人種」としてシンガポールにより分類され、「マレー」と呼ばれる人々及びそのカテゴリーを鍵括弧つきで「マレー人」とすることにする。
4. 1990年代のマスメディアの「マレー人」に関する報道では、「怠惰」という言葉は用いられていない。その代わりに「向上心と動機の欠如」という「怠惰」を連想させる言葉を用いて「マレー人」のシンガポールでのあり方を批判している。
5. ここでは論じないが、歴史的に見てインドネシアとマレーシアは、特に、マレーシアはシンガポールと政治的に深い関わりを持つ。
6. しかし、1990年の国勢調査の結果では、キリスト教徒の全人口に占める割合は、12.5%とされている (Department of Statistics 1992b:2)。
7. カリスマ教会とは、聖霊の働きによる異言や癒しなどの奇跡を強調している教会を指す。
8. シンガポールとインドネシアは地理的に極めて近い位置にあるので、シンガポールでは、インドネシアのラジオ番組が受信でき、また、特殊なアンテナを設置することで、テレビ番組も受信できる。インドネシアの新聞も、コミュニティの成員の何人かは購読している。
9. コミュニティには、身分証明書の「人種」の記載をバタックに変更した者も小数だが存在する。
10. しかしながら、家庭では話されない華語を選択するため、この試みは挫折することが少なからずある。

## 参照文献

## Department of Statistics

1992a *Singapore Census of Population 1990: Households and Housing.*

*Statistical Release 2.* Singapore: SNP Publishers Pte Ltd.

1992b *Singapore Census of Population 1990: Religion, Childcare and Leisure*

*Activities. Statistical Release 6.* Singapore: SNP Publishers Pte Ltd.

## Dewan Redaksi Program PAK-PGI

1988 *Cermin Remeja: Untuk Siswa SMP Kelas III.* Jakarta: BPK Gunung Mulia.

## Heng, Russell and Sumiko Tan

1989 "Religion in Singapore: report of a national survey." *The Straits Times*

April 17:19.

Kantor Pusat HKBP

n.d.a *Panindangion Haporseaon dari Huria Kristen Batak Protestant*. Pematang Siantar: HKBP.

n.d.b. *Panindangion Haporseaon (Konfessi) ni Huria Kristen Batak Protestant (HKBP)*. Pematang Siantar: HKBP Pematang Siantar.

Kipp, Rita and Susan Rodgers

1987 "Introduction: Religions in Transition." In *Indonesia: Religions in Transition*. Rita Kipp and Susan Rodgers, eds. Pp.1-31. Tucson: University of Arizona Press.

Ramage, Douglas E.

1995 *Politics in Indonesia: Democracy, Islam and the Ideology of Tolerance*. London: Routledge.

Soong, Martin

1989 "Christianity, secularism on the rise: Report." *The Straits Times* April 17:22.

*The Straits Times*

1989 "Trend affecting other social factors like distribution of wealth and influence: more switch religions in 1980s." *The Straits Times* April 17:1.

Tong, Chee Kiong

1989 *Religious Conversions and Revivalism: A Study of Christianity in Singapore*. A Report prepared for Ministry of Community Development

## ◆ 人類学研究所 所長日誌 (2002 年 1 月—12 月) ◆

記録：クネヒト・ペトロ

1/1 (火) 大雪の大晦日の後、東北の村で日本晴れの元朝を迎えた。夕べ泊めて下さった家族の方々と、共に村の宝物である不動三尊像が安置されている小さな堂で元朝参りを済ませた。お正月ではなければ、鎌倉時代の作と思われるこの三尊像を観る機会が殆どない。堂が建っている崖の下で広がっている湖の細波が、朝日の光と遊んでいる様だった。湖の向こう岸で見える村はまだ静けさに包まれていた。村の隣山の後ろから、栗駒山は村を守っているように、広くて真っ白な峯を見せていた。この平和な風景をゆっくり眺めると心が静かになり、世間を騒がしている復讐と戦争の騒音は、どこへともなく消えてしまったようだった。法を守っている不動尊が、この平和を守ってくれるように願った。

1/10 (木) 東京外国語大学 AA 研の三尾裕子がみえた。AA 研で進行中である浅井恵倫と小川尚義の資料を整理するプロジェクトとの関連で、人類学研究所が持っている小川資料の中から幾つかを選んで、写真を撮る業者に渡すのに立ち合うためだった。それらの写真を AA 研で作成される予定のホームページに載せたり、CD ROM を作ったりするために使う予定だ。

1/12 (土) 東京大学東洋文化研究所の宮嶋博史教授が研究代表である、科学研究費補助金によるプロジェクト「東アジアの家系記録の総合的比較研究」の一角として東大で開かれた研究会で、宮沢千尋研究所員は「ベトナム『家譜』」の題で研究発表した。

1/18 (金) 日中国交 30 周年の年に因んで開かれた「周恩来展」の開会式に、クネヒトは招待され、出席した。池田大作の業績を称えるところが目立ったが、周恩来の生涯についての写真パネルは、特に記憶に残った。周恩来という人物の一生は、中国の最近の歴史との中で起こった様々な変化を、よく表していると思う。

2/2 (土) 中根千枝先生は、去年の暮れに文化勲章を授章された。それを祝って、神保町の如水会館で催された講演会、並びに「先生を囲む会」にクネヒトが出席した。若い時にイギリスへ留学された経験を語る先生のお話して、英国の人類学の「黄金時代」が目の前に浮かんできた。研究者としての出発を語り、自らの人類学観を述べられる先生は嬉しそうだった。しかし、少しでも先生と話しする機会を掴めず、残念に思った。

2/4 (月) クネヒトが人類学研究所発行の雑誌 *Asian Folklore Studies* の原稿を、東京の出版社に渡したこの日は、画期的な日だ。発行が遅れていることは気にかかるところだが、Chicago 大学の John R. Perry 教授の快い協力を得て、優れた研究者陣を集め、*Folklore of the Iranian Region* という題で、バラエティに富んだ特集を組んでいただいた。この特集で *Asian Folklore Studies* の還暦の年は、立派に完了した。Perry 教授との共同作業は実に楽しかった。彼に篤く感謝している。

2/16 (土) 総合政策学部が担当している「南

山アジアプロジェクト」(NAP)に協力するように頼まれて、宮沢は十五人の学生を約一ヶ月の予定で、ベトナム・タンロン大学とカオバン省へ引率して出発した。ベトナムに滞在している間に、ハノイ大学研究プロジェクト「東アジアの家譜」のために、中西裕二福岡大学教授の講演「日本の『家譜』」をコーディネートする。3/16に帰国する予定だ。

2/20(水) BielefeldのF. Georg Heyne氏が持っている、中国のトナカイ・エウエンキに関する資料を閲覧できる機会を得て、クネヒトはドイツへ出発した。春先の日本から、厳しい冬へ戻ったような感じだ。窓の外で強風が吹いて、吹雪になっていたが、暖かい部屋で、中国革命以前に大興安嶺のトナカイ・エウエンキの生活を目撃したHeyne氏のロシア人の友人が書いた膨大な数の手紙を、一枚一枚読んでノートを取った。文字どおりあつと言う間に、与えられた一週間が経ってしまった。その間、日曜日にモルモンの礼拝に参加したのは、初の経験だった。3/1の朝、東シベリアの山々を上空から眺めてから、名古屋に到着した。

3/9(土) 民博の杉本良男担当の研究会「キリスト教と「文明化」の人類学的研究」に出席する目的で、クネヒトは千里市へ出張した。

3/14(木)「雪舟展」を見るべきと思って、クネヒトは友人と共に京都へ遊びに行った。雪舟の絵を、初めて見てからの「一目惚れ」だった。ラフな筆で描かれて、墨の染みのように見える山水図を幾ら眺めても、想像が飽きることはない。絵を見て、我を忘れそうになったところで、突然現実に戻った。何故なら、会場で全く思いもよらず、30年

程前に東京で日本語を教えて下さった中里良二先生ご夫妻に出会ったからだ。願っても得られない幸運だった。

3/19(火) 台湾の中央研究院語言学研究所の李壬癸教授が来名し、23日まで小川尚義資料を更に調査した。毎日、朝から夕方まで研究所の会議室で古い資料を相手にしながら、静かに研究している先生の姿をみて、何時も励まされる。

3/24(日) クネヒトは朝早く青森へ飛んで、ドイツの国営テレビ(ZDF)の撮影チームと合流した。München大学の火山学者の調査研究活動についてのドキュメンタリーを作るのは第一の目的だったが、信仰の対象である日本の山のもう一つの側面も紹介したいと監督の希望があったので、クネヒトが案内するように頼まれた。10日間程の付き合いだったが、恐山から始まって、富士山、木曾御岳、桜島の山と、鹿島神宮で鯨を抑えていると信じられている要石を訪ねた。弘前の笹森建英、畠山篤や名古屋の赤池憲昭等の先生方のお陰で撮影の作業がスムーズに進行した。まだ深い雪と氷に覆われた富士山と御岳山が印象的だったが、雪も人影も全くない恐山の静けさが、チームの全員にとって一番印象深いものであった。慌ただしい旅だったので、大した成果を期待できないだろうと思ったが、多くの方々の好意で、いい仕事ができたとチームの人達が言って、満足したようだ。協力して下さった方々に深い感謝の意を表す。

4/1(水) 今日、人類学研究所のスタッフがかなり若返りした。昨年、アメリカ合衆国のIllinois大学で人類学のPh.D.を取得した齋藤千恵さんが、非常勤研究員として研究所に加わった。トバ・バタックを研究し

ている齋藤さんは、シンガポールでフィールドワークを行い、トバ・バタック移民の教会で宗教とエスニシティの問題を追求して、その資料をもとに Ph.D.論文をまとめた。研究所でこの研究を更に深めて、論文の執筆に集中するにしている。けれども、就職のことも考えなければならいので、忙しい身になりそうだ。

昭和区役所から届いた通知に応じて、介護福祉課の窓口へ行った。何と、「敬老特別乗車券」を渡していただいた。一段と年を取ったような気がしたが、名古屋市民のお陰で、市営バス・地下鉄に無料で乗れる大切な贈り物をいただいた。ありがたいことだ。

4/6 (土) 是非とも南山大学を訪問したいと希望して、ホーチミン市の国家大学 University of Social Sciences & Humanities の学長、Dr. Ngo Van Le とその一行が研究所を訪ねた。Dr. Ngo が談話会で「クーロン (Cuu Long) デルタにおける民族と宗教の問題」と題して、講演して下さった。少数民族についての興味深い話しだったが、残念乍ら土曜日のため出席者が少なく、やや淋しい集まりだった。宮沢が通訳してくれたので助かった。本日の訪問は、これからベトナムの研究者との交流を深めるきっかけになるように期待している。

4/22 (月) 夕刻に、研究所で人類学研究所主催の新しい長期研究プロジェクトの説明会が、プロジェクト担当の宮沢研究所員によって開かれた。今回の研究テーマは「アジアにおける市場 (market)」だ。経済学の研究ではなく、できるだけ多彩な学際的研究であるように期待している。南山大学

の教員を中心に、人類学、経済学、国際開発研究、文学等の分野で研究活動を行なう方々の協力を得た。出発は少し遅れがちだったので、早く軌道に乗ってくればいいなと願っているところだ。

4/25 (木) 人類学研究所第 7 期長期研究プロジェクトとの関連でフィールドワークを行ないたく、宮沢は 5 月 12 日 (日) までの予定でベトナムへ出発した。バクニン省ヴィエムサー村で農業合作社大会及び主任選挙を調査するためだ。このような大会には今まで外国人が参加した例がないそうなので、今回の宮沢の調査成果に大きな期待が寄せられている。

5/12 (日) 「アジア民族文化学会」の研究例会に出席する目的で、クネヒトが上京した。学会誌の創刊に使われた英文名称に対してクレームを付けたので、逆に学会の運営委員会に加わるように頼まれてしまった。発表会のために約半日を用意している学会なので、発表者は、資料も豊富に紹介しながら、詳しく発表できる十分な時間が与えられる。有り難いことだ。

4/26 (金) 言い方が少し変だろうが、京都大学の人文科学研究所に来ている Leiden 大学の Jan van Bremen 教授を「裾分けして」もらった。随分前から、一度 van Bremen 氏に、研究所を訪ねていただければいいなと思ったことがあるが、そのチャンスはなかなか現れなかった。今回は、その夢がやっと叶ったことを有り難く思う。名古屋の墓地を巡りまわった後に、少し慌てて大学にみえて、到着してすぐ講話に入ったので、大変だったと思うが、“Bridging the demographic divide: Afterlives and niches for the dead in Japan” という話し

はホットニュースだった。日本人の人命が伸びているに連れて、死者に対する儀礼は徐々に短縮されているという van Bremen 氏の指摘が、特に記憶に残っている。

5/17 (金) クネヒトは、翌日に開催予定の学会理事会に出席するために上京したが、今日は東京駅で上海社会科学院教授の王宏剛先生に会えた。中国のシャーマニズムに大変詳しい王先生は、クネヒトが代表者になっている中国東北部のシャーマニズムの研究プロジェクトの研究協力者にもなっている。現在、千葉大学で研究している先生に、我々来年まとめなければならない報告書に、是非とも投稿して下さいようお願いしているので、今回はその打ち合わせのために、会った。けれども、お互いにうまく通じる言語がないので、于曉飛が快く通訳してくれた。

5/20 (月) 恒例のことだが、クネヒトはリトルワールドの評議会に出席した。毎回同じ様なことだが、全く無駄な話しがこの時に出ないように、「根回し」出来ていることに驚く。これと比べると大学の委員会は、対象的なものだ。今回は、評議委員の一人から、北京の hutong (胡同) を一つ野外博物館に移建したらどうかという提案があった。北京のオリンピック・フィーバーと高層ビルのブームに負けて、これら古い界限は相次いで犠牲になって、余儀なく壊されてしまっている。

6/2 (土)、3 (日) 金沢大学で第 36 回の研究大会が催された。宮沢とクネヒトが参加した。現在の校舎が出来たばかりの頃集中講義に招かれて、この山へ来て、人里離れたこの場所に驚いたことがある。ところが、今回の学会では、あの時私の拙い講義

を聞いてくれた学生の一人が、博士号を獲得して、研究発表したのは喜ばしい出来事だ。

6/6 (木) 国立民族学博物館に在籍中の Arne Røkkum 氏を招いて、懇話会を持った。“The role of chance in augury rites and in anthropological fieldwork: A view from the Yaeyama Islands” という講話の題目がなかなか示唆的だった。Chance とは「好機」か、又は「偶然」か、どちらだろうか。特に民族誌的研究の場合には、chance が purpose と連結されるのは、研究の成功又は失敗を決める重要なことだという発言は刺激的だった。個人的なレベルでも Røkkum 氏との話しは、アイデアに富んで、楽しかった。

6/7 (金) 人類学研究所主催公開講演の新しいシリーズを、紛争と暴力の原因を考える目的で企画して、「テロや紛争などの暴力行為はなぜ起こるか」と題した。本日の第 1 回の話しは、人間環境大学の片田珠美助教授が引き受けて下さった。「暴力の起源について —— 攻撃性の精神分析 ——」というテーマで、フロイト心理学に立って、片田氏は攻撃が自我にとって外的対象になっているものとの間に起こる、と述べた。しかし、この攻撃に二側面がある。つまり、外的対象に対する攻撃と外的対象による攻撃の二側面だ。幾らか、Burkert や Girard などの理論に似ているところがあった。反応がよかったので、時宜に適ったいい話しだったと思う。

6/9 (日) 南アルプスと鈴鹿の山々がみえる外国語学部の会議室で、宮沢の惜しみのない全面的努力で、「第 1 回日本・ベトナムパクニン省研究者会議」が開かれた。宮沢に

言わせるとベトナム・バクニン省は、ベトナム「伝統文化」の故地の一つとして、多くの外国人研究者に広く門戸を開いているようだ。日本だけでも、6人の研究者がいて、当日は、神田外語大学、大阪外国語大学、名古屋商科大学、奈良女子大学、京都大学、金沢大学、アジア埋蔵文化基金などから関心のある人が集まった。人類学、農村社会学、地域学、考古学と歴史学の研究者が活発な討論を行った。

6/15 (土) 杉本氏の研究会に出席するために、クネヒトは千里へ行った。自分は研究発表を準備する時間はなかなかなくて困っているが、南山大学で担当している「異文化との出会い」の講義のためによく参考になる研究会だ。

東洋大学の末成道男教授が代表者である国内科研「ベトナムに関する日本人人類学研究の総括と現地への発信」の研究分担者初会合が東洋大学で行われ、宮沢が参加した。ここ10年、急激にベトナム人類学研究が進展し、若い研究者層が厚みを増したことが痛感された。

6/16 (日) 昼過ぎの便でクネヒトは北京へ出発した。春から待ち兼ねたことだが、出発の日はなかなか決まらず、大丈夫かと思ったこともある。急に決まった出発なので、今度やや慌てるように出かけた。北京で通訳の Erdemtu 氏と合流して、翌日もう海拉尔へ飛んだ。慌て気味の理由は、昨年夏に知り合った男性が受ける、シャーマンになるための儀礼だ。折角招待していただいたのに、このチャンスを逃がすつもりは、少し無理しても勿論なかった。18日の昼過ぎに男性の村に着いたが、儀礼がいつ始まるか誰もはっきり言えなかったので、全て

をその成り行きに任せればいいと判断した。深夜の12時頃、少し仮寝するために、本人の親戚の家へ案内してもらった。けれども、儀礼の始まることが心配になっていて、少しも眠れなかった。突然、男性の家から太鼓の音が聞こえてきたので、急いで起きて、儀礼の場へ行った。丁度間に合って、ほっとした。午前3時だったが、東の方の空にはもう既に太陽が登ろうとする、幽かな兆しが出ていた。午後になって儀礼が終って、今度は「直会」がはじまったが、羊肉を食べ、強い白酒を飲むように勧められてすっかり酔っ払ってしまった。けれども、明日には、またこの男性を訪ねて、昨日の儀礼についてゆっくり伺うことができた。その時に、彼は共産党員でありながら、シャーマンになったことが初めてわかった。草原に包まれた村は、都市から遠いなと思った。22日に名古屋へ帰ってきた。

6/29 (土) 王宏剛先生は千葉大学のCES研究会で、中国のシャーマニズム研究の現状について発表する予定なので、クネヒトが参加することにした。ここ数年の間に中国では、シャーマン研究が如何に発展してきたかを理解するのに、とても役に立つ発表だった。学生発表者が、パワーポイント等をうまく使いこなしているところを見て、「機械の敵」の私は感激を覚えた。

7/5 (金) 中部大学教授、峯陽一氏は、公開講演シリーズの第2回の講演で「憎悪から和解へ——南アフリカの経験」について話しして下さった。自らの経験を踏まえて、南アフリカの人々が、アパルトヘイト制度が遺した深い傷をどう治癒しようとしたかを語った。本当の和解を成立させるために、関係者が真剣になって、意識的に努力しな

ければならないということが明らかになったと思う。新しい状況の中で、共同生活を再建しようとする人たちの気持ちがよく伝わって来た話だった。

7/7 (日) 7月の第1日曜日は、クネヒトにとっては少し特別なものだ。何故なら、会長を勤めている「米山学友会」の総会日だからだ。今年は二任期目が修了したので、代わってもらえると思ったが、かえって、再選が可能になるように会則が改正された。考えてみれば、人類学者として、アジアを中心に世界の多くの国々から来て、日本で勉学する若い人たちには少しでも役に立てばいいのではないかと思う。

7/13 (土) 「Market 研究会」で宮沢は、収集したばかりの最新の調査資料を利用して、「社会主義市場体制下のベトナム北部における農業生産合作社——『経済計算制(hach toan)』の中の『合作社によるバオカップ(bao cap) 制度』——」というテーマで報告した。クネヒトは学会の理事会に出席するため上京して、留守だった。

7/20 (土) 南山大学で「オープン・キャンパス」の制度を取り入れたのは久しいが、クネヒトは初めて模擬授業するように頼まれた。どうせ、大学を宣伝する目的の授業なので、もう少し若い教員の方を導入すればいいのではないかと思った。「死」とそれに関する人間の様々な考え、態度、儀礼などをテーマに選らんだので、特に魅力的ではないだろうと考えた。事前に申し込んだ人数が少なかったため、やはり残り人数がないだろうと思ったが、実際に数十人が来て、教室が殆ど一杯になったので、驚いてしまった。

7/27 (土) 中部人類学談話会の例会で、齋

藤千恵が「トランスナショナル・コミュニティにおけるエスニシティ：シンガポールにおけるキリスト教徒インドネシア移民の事例から」と題して、Ph.D.論文の研究成果を報告した。紹介と司会はクネヒトが勤めた。

7/28 (日) 手術した妹の健康状態を案じて、クネヒトは一時帰国した。幸いに思ったより心配する必要がなかったので、安心した。折角の機会だったので、滞在中に、日本で調査している村の人々の希望に答えて、彼らがかつてホームステイしてお世話になったスイスの農家を訪ねて、日本の村を是非訪問してくれるように誘ってみた。とりあえず、反応が悪くなかったが、スイスの農家にとって日本は遠くはなれている世界のように感じたが、かならずしも地理的な距離の問題ではない。

8/5 (月) 宮沢はパリへ出発した。フランス語を研修する傍らで、フランス在住ベトナム人の基礎調査を行い、文献も収集した。パリから今度、直接にハノイへ飛んで、9月15日まで現地調査に励んだ。バクニン省ヴィエムサー村で引き続き農業合作社を調査し、ハノイ市ドンガック村で、現在の「家譜」保存状態を調べて、最後に初めて南ベトナムへ移動して、メコンデルタ・カマウ省およびカントー市で、いわゆる「カオダイ革命派」ミン・チョン・ダオ派に関して予備調査を試みた。

8/15 (木) クネヒトは北京へ出発して、翌日通訳の Erdemtu 氏と海拉尔へ。何時もと違って、着陸する前に飛行機が市内を見せてくれるように大きなカーブを描いて海拉尔の上空を飛んだ。着陸すると空港ビルの前で民族衣装の踊り子と楽隊が待っていて、

歓迎してくれた。Hulunbaer 市が誕生したばかりの祝いに駆けつけた要人たちの歓迎だった。Hulunbaer 市が出来た結果、海拉尔の位が下げられ、区になった。翌日、海ラルの naadam (スポーツの祭り) が開かれると聞いて、先ずそれを見学することにした。早朝、オボのお祭りに参加してから naadam の会場である大きなスタジアムへ移って、先ず知り合いの友人のパオで、うどんの朝食を取った。美味しかったが、作り方を見た時に、大丈夫かなと心配したが、大丈夫だった。その後、一日をすごい埃のなかで過ごしたが、競馬とモンゴル相撲を見ている内に時間が経つのを忘れてしまった。今回の調査では、数人のシャーマンたちとの付き合いを深めることができたお陰で、数々の儀礼を見たり、貴重な話を聴いたりすることが出来た。約 3 週間の滞在だったが、その間、何回も「あなたを海ラルの naadam のところで見たよ」と言われた。お祭りも、調査の応援者になると思った。

海ラルで日本人の姿を見掛けることはそんなに珍しくはないが、ある日曜日に小松和彦氏の奥様と娘さんに会って、正直に言って、驚いた。モンゴル人の友人との楽しい食事の場だった。

日本へ帰る途中で、北京に再び立ち寄った時に、中国芸術家協会の白庚勝先生に会って、上海の料理を味わいながら、来年、北京で開かれる予定のシャーマニズム研究大会などについて話し合っ、いい時を過ごした。

9/22 (日) 本日は、IUEAS の中間研究大会が東京で始まる。午前中に組織委員会の会合があつて、クネヒトはそれに出席したが、

研究大会に出席しかねた。

9/25 (水) 「市場 (market)」研究会で森部一氏が「タイ農村における新しい経済発展と仏教とのかかわり——序説」と題して、タイ国の“開発僧”の社会的活動について発表した。

10/7 (月) ちょっと特別な日だ。クネヒトの友人、嘉木揚 凱朝氏の案内で「中国社会科学院日文化交流団」が、南山大学の人類学研究所と宗教文化研究所を訪ねた。卓新平氏を団長に、中国社会科学院から 5 名、北京雍和宮 5 名の方々は約一週間をかけて、中部地方の宗教施設と研究所などの研究機関を訪問し、観察した。短い訪問だったので、必ずしも十分に話し合うことができなかったと思うが、中国の知識人が、今どれほど外国の研究者との交流を求めているかを肌で感じる程よくわかったと思う。研究所で設けた簡単な懇談会の席で、宮沢が中国語を話したのは驚きで、いい発見だった。私にとっては、数年間前に卓団長に北京でお目に掛かったことがあるので、今回の再会は特に嬉しい出来事だった。

10/16 (土) 国内科研「ベトナムに関する日本人人類学研究の総括と現地への発信」の研究分担者の第 2 会合が、人類学研究所で開かれた。本田守氏に続いて、宮沢が「カオダイ教ミン・チョン・ダオ派について」の題で調査研究を発表した。

11/14 (木) Oxford 大学で Ph.D. を取得し帰国した、杉下かおりさんが研究所を訪ねた。クネヒトの昔のゼミ生なので、Ph.D. 祝いのささやかな夕食会をした。南アフリカの Witwatersrand 大学で研究員のポストに着く話があるそうだが、色々な問題が残っていて、決まるかどうかはまだ不安定だそ

うだ。結果を待つしかない。

11/15 (金) 人類学研究所公開講演シリーズの第 3 回目として、大阪大学の栗本英世助教授が講演して下さった。テーマは「内戦の人類学的研究——その可能性を探る」だった。栗本氏は、エチオピア西部地方で二つの社会の間に起こった、緊張状態と摩擦について話しをして、その中で生じた所属意識とそれが齎した様々な問題について、わかりやすく説明して下さい。

11/16 (土) 上海の社会科学院の王宏剛先生を迎えて、クネヒトが代表になっている科研プロジェクト「中国東北部におけるアルタイ語族の諸民族のシャーマニズムと社会に関する人類学研究」との関係で「薩満教与満族氏族制度、八旗制度」について中国語で発表していただいた。とても刺激的な話なので、活発な議論が展開していて、気が付かないうちに夕刻になってしまった。とても参考になる発表だった。中部大学から研究分担者の畑中幸子名誉教授と、黄強教授が駆けつけてくれた。黄氏が通訳の労を引き受けてくれた。

11/26 (火) 研究所のコピーエディター、Clark Chilson 氏は Toronto で開催された American Academy of Religion Conference で “Overt and covert Shinshu: The rhetoric of secrecy in contemporary secretive Shinshu confraternities” のテーマで研究発表した。彼がそれで、ここ数年の間、真宗の秘密集団について進めているフィールドワークの成果の一部を報告した。この発表が、将来彼の就職への踏み台に繋がれば好ましいなと思う。

11/27 (水) 「市場 (market)」研究プロジェクトの年内最後の研究会で人類文化学科

の吉田竹也助教授が「市場としての観光地——バリ島ウブドの日本人店舗について」と発表した。彼の話しを聞いて、少しずつこの研究会の特色が出てきている気がした。次回の発表は私が引き受けたが、後で考えて見たら、少し冒険的な決断ではなかったかと思って、うまく準備できるかと心配するようになった。

11/29 (金) 東北大学大学院国際文化研究科が企画した、創立 10 周年記念フォーラム「世界の中の日本研究」で発表するように招かれて、クネヒトは「東北地方でのフィールドワーク——回顧の試み」について話した。Temple 大学の John A. Lent 教授、福井県立大学の Karel Fiala 教授と、上智大学の Peter Milward 名誉教授という素晴らしい教授陣と肩を並べるのは、何となく恐かった。しかし、聴衆の反応が良かったので、落ち着いてきた。懇親会の時、この大学院を卒業して、現在南山高校男子部で教鞭を取っている若い先生に会えたのは、特別な楽しみだった。フォーラムが終わってから、私の東北との付き合いを最初から応援して下さいきた友人と共に、ゆっくり東北の酒を味わった。翌日、10 年程前にスイス研修旅行に連れて行った村の方々と一緒に、村の温泉で楽しい一時を過ごした。村人との付き合いはもう 30 年位の長いものだ。

12/6 (金) いよいよ、研究所の公開講演シリーズの最終回になった。今回は日本学術振興会特別研究員の近藤光博氏に「ヒンドゥー・ナショナリズムの諸問題とガンディー思想の可能性」について、話ししていただいた。近藤氏は、複雑な問題を丁寧に説明してくれたので大好評だった。今年のシ

リーズのいい締めくくりになった。今回のシリーズの講演に、毎回 30 人前後の聴衆が集まってきたので、まずまずの成功だった。12/14 (土) 名古屋大学法制国際教育協力研究センターの鮎京正訓教授が代表者である「アジア法整備支援」に協力している宮沢が、今日名古屋大学での研究会で「ベトナムの郷約と日本ベトナム郷約研究」というテーマで発表した。

南山大学では、昨年が続いて、外部の方々による評価の会合が開かれた。今回は南山大学の三研究所と各研究センターが評価の対象になっていたので、これらの施設長は一日中缶詰め状態だった。各施設の事情がそれぞれ違うので、評価するのは難しいと思う。評者が研究活動をある程度誉めたとしても、その弱点も指摘した。大学の事情も勿論あるが、大学内の研究協力者の授業負担を減らす可能性があれば、大学の教員にはもう少し積極的に協力してもらえそうではないかと思った。

12/26 (木) 名古屋大学法制国際教育協力研究センターの「アジア法整備支援」の協力員である宮沢は、ハノイで開かれた「ベトナムの郷約・国際シンポジウム」にコーディネーターとして参加した。ベトナムの事情に明るくない他の参加者にベトナム事情を初め、村落で再編されつつある郷約事情、ベトナム法制度事情等を説明した。29 日には、バクニン省人民委員会で省選出国会議員団副団長に極めて具体的で、率直な説明を受け、一同関心した。オープンで社交的、11 世紀の初の安定独立王朝李朝以来の文化的プライドを持つバクニン人ゆえと、心の中で拍手を送った。任務を終えて、大晦日に成田へ帰って来た。

◆ 研究所の活動 ◆

◎ 南山大学人類学研究所第 7 期長期プロジェクト『アジアにおける市場 (market) をめぐる固有論理に関する学際的研究』

研究会 (南山大学人類学研究所 3 階会議室にて開催)

第一回 2002 年 7 月 13 日 (土)

テーマ: 「社会主義市場体制下のベトナム北部における農業合作社—『経済計算制 (hach toan)』の中の『合作社によるバオカップ (bao cap) 制度』

発表者: 宮沢千尋・南山大学人類学研究所講師

第二回 2002 年 9 月 25 日 (水)

テーマ: 「タイ農村における新しい経済発展と仏教の関わり」

発表者: 森部一・南山大学人文学部教授

第三回 2002 年 11 月 27 日 (水)

テーマ: 「市場としての観光地—バリ島ウブドの日本人店舗について」

発表者: 吉田竹也・南山大学人文学部助教授

本プロジェクト関連で受けた研究助成

① 東海学術振興会研究助成

② 南山大学経営研究センタープロジェクト助成

× × × ×

◎ 公開講演会シリーズ「テロや紛争などの暴力行為はなぜおこるか」

第一回 2002 年 6 月 7 日 (金)

場所: 南山大学 E 棟 E11 教室

講師: 片田珠美氏 (人間環境大学助教授)

テーマ: 「暴力の起源について—攻撃性の精神分析—」

第二回 2002 年 7 月 5 日 (金)

場所: 南山大学 E 棟 E11 教室

講師: 峯陽一氏 (中部大学教授)

テーマ: 「憎悪から和解へ—南アフリカの経験」

第三回 2002 年 11 月 15 日 (金)

場所: 南山大学 E 棟 E11 教室

講師: 栗本英世氏 (大阪大学助教授)

テーマ: 「内戦の人類学的研究—その可能性を探る」

第四回 2002 年 12 月 6 日 (金)

場所: 南山大学 E 棟 E11 教室

講師: 近藤光博氏 (日本学術振興会特別研究員)

テーマ: 「ヒンドゥー・ナショナリズムの諸問題とガンディー思想の可能性」

× × × ×

## ◎ 研究所員の出版活動その他

○クネヒト・ペトロ

## 出版活動

☆『『菊と刀』—日本文化の型：ルース・ベネディクト著』松田素二、川田牧人編著『エスノグラフィ—ガイドブック—現代世界を複眼でみる』京都：嵯峨野書院 114—117。

☆”Mountains are not just Mountains.” *Shaman*, 10 143-159.

## 講演

☆「東北地方でのフィールド・ワーク—回顧の試み」東北大学大学院国際文化研究科創立10周年記念フォーラム『世界の中の日本研究』仙台市。11月20日

## 受けた研究助成

☆科学研究費補助金(基盤研究 (B) )(1)  
「中国東北部におけるアルタイ語族のシャーマニズムと社会に関する人類学的研究」

○CHILSON, Clark

## 出版活動

“Religion Concealed and Revealed: The Uses of History by a Secretive Shinshu Leader.” *Japanese Religions* 27/2, 195-206.

## 学会発表

“Overt and covert Shinshu: The rhetoric of secrecy in contemporary secretive Shinshu confraternities,” Toronto: American Academy of Religion Conference, 26 November.

○宮沢千尋

## 出版活動

☆研究ノート「共同研究アジアにおける『市場(market)』の固有論理」(森部一、中裕史と共著)『アカデミア』人文・社会科学編第74号、677—695。

☆ベトナム北部・紅河デルタ村落における村落運営とリーダー選出—農業生産合作社大会と主任及び管理班選挙—

『南方文化』第29輯、21—42。

## 受けた研究助成

東海学術振興会研究助成『アジアにおける市場(market)をめぐる固有論理に関する学際的研究』(研究代表者)

☆南山大学経営研究センター研究プロジェクト助成『アジアにおける市場(market)をめぐる固有論理に関する学際的研究』(研究代表者)

☆科学研究費補助金(基盤研究 (B))「東アジアの家系記録の総合的比較研究」(研究協力者)

☆科学研究費補助金(基盤研究 (B))「ベトナムに関する日本人類学研究の総括と現地への発信」(研究分担者)

## 社会活動

名古屋大学法政国際協力センター国内研究員。ベトナムへの法整備支援。

## ASIAN FOLKLORE STUDIES

Volume LXI, 2002

## ARTICLES

- The Deity and Wind of Ise.....Peter METEVELIS
- “The Blessing of Living in a Country Where There Are *Senryu*”: Humor in Response  
to Aum Shinrikyo.....Richard A. GARDNER
- Cultural Accommodations in Southeast China: The “Han Miao” and Problems in the  
Ethnography of the Hmong.....Nicholas TAPP
- From Oral Tradition to “Folk Art”: Reevaluating Bengali Scroll Paintings  
.....Beatrix HAUSER
- Cinderella in Tibet.....Wayne SCHLEPP
- Tales, Tanks, and Temples: The Creation of a Sacred Center in Seventeenth-Century  
Bengal.....Pika GHOSH
- The Revival of Folksongs in South Korea: The Case of *Tondollari*  
.....Roald MALIANGKAY
- Jingu Kogo *Ema* in Southwestern Japan: Reflections and Anticipations of the  
*Seikanron* Debate in the Late Tokugawa and Early Meiji Period  
.....Richard W. ANDERSON
- From Constantinople to Istanbul: Two Sources on the Historical Folklore of a City  
.....Arzu ÖZTÜRKMEN

## OBITUARY

- Between the Hingan Taiga and a Moscow Public Library: In Memory of  
Anatolij Makarovic Kaigorodov, 1927-1998.....F. Georg HEYNE

## RESEARCH MATERIAL

- Folk Medicinal Plants in the Sikkim Himalayas of India  
.....H. Birkumar SINGH, P. PRASAD, L. K. RAI

## REVIEW ARTICLES

- Indonesian Folktales.....Kristina LINDELL
- Epic and Asian Folklore.....Vibeke BØRDAHL

## BOOK REVIEWS

雑誌 ASIAN FOLKLORE STUDIES の購入などに関するご連絡は下記のところをお願いいたします。なお、年間の購読料は、¥6,000(団体)と ¥3,000(個人)となっています。

連絡先

〒466 - 8673 名古屋市昭和区山里町 18

ASIAN FOLKLORE STUDIES 編集室

Tel (052) 832 - 3111(南山大学代表)

Fax (052) 833 - 6157